

国立国語研究所学術情報リポジトリ

高知県幡多郡大方町方言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-10-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土居, 重俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003028

方言録音資料シリーズー8

高知県幡多郡大方町方言

土 居 重 俊 編

1 9 6 8

このテキストは，総合研究「地方における話しことば教育法改善のための基礎的研究」（代表者 大石初太郎）の一部として，研究用の資料として作られたものである。

方言の録音方法，方言の表記の方法などのあらましについては，別に作った「方言の録音とテキストの作成について」（国立国語研究所 話しことば研究室編）を参照されたい。

ここに収めた方言の録音とテキストの作成とは，高知大学教授 土居重俊 が担当した。

も く じ

収録地点とその方言について 2

表記について 3

本文

1. 木挽閑談 5

2. 漁師の思い出話 16

注 34

収録地点とその方言について

1. 収録地点名：高知県幡多郡大方町

2. 収録地点の概観

中村市の東方に位置する農村兼漁村。広い海岸線と松林に囲まれた町。藩政時代は幡多郡入野郷と呼ばれた。昭和18年3村が合併して大方町となり、昭和31年に4村合併。米原に尊良親王行在所跡がある。産物として米・麦のほかナロール（芳樟）・葉たばこの生産が盛んである。国道56号線が町を東西に貫通して、近く国鉄中村線が開通する。

3. 収録した方言の特色

四つがなを区別する。連母音が長音化されない（特殊の語法的現象は別）。ガ行ダ行の前の母音が鼻音化する。ソーニカーラン（そうらしい）、ノーガワリー（具合が悪い）などの用法があり、土佐方言的特色をよく備えている。ただしアクセントは乙種である。

4. 地点選定の理由

幡多方言の代表的地点と思われる。

表 記 に つ い て

(指定の字母以外に使用した字母, および使用した補助記号)

特 に な し

1. nasalizationが強く出る場合(たとえば〔niⁿgats^su〕)も, 弱く出る場合も, 一様に $\tilde{\square}d$; $\tilde{\square}g$ のように表記してみた。

1. 木 挽 閑 談

録音日時 1967年 9月3日

録音場所 林家(大方町湊川)

話し手

(略号) (氏 名) (性別) (生 年) (職 業) (居 住 歴)

H 林八十次 男 明治15年生 木挽→農業 高知県幡多郡大方町湊川に永住

解説: 老木挽が木を切る体験談を相当具体的に話している。

H kobikisuru hitowa naine: ima dabano: gaqko:-
木挽をする 人は いないね 今 駄場の(地名) 学校

no sorano tju:kitijo ima takakiku⁽¹⁾one: tju:wa
の 上の 忠吉よ 今 高木の家よね 忠は

naikendo ano ieo tateru tokiranine: kuboka-
いないけれど あの 家を たてる ときなどにね 窪川

watjo:~no matubaka: ju: tokorono okuni oreai
町の 松葉川と いう ところの 奥に オレアイ
(地名)

ju:~kianko⁽²⁾: ga aru~ga unto hutoi jamarasi~ga
という 官公が あるが うんと 大きい 山らしいが

ano ieno ano ieno honbasirawa to~ga:~no to~ga:-
あの 家の あの 家の 本柱は 梶の 梶

no sorja riqpana kio sanzjakukakuba:~no monoo
の それは りっぱな 木を 三尺角ぐらいの ものを

kasja~de: ako ite kio ko:tjoite kasja~de zu:-
荷車で あそこへ 行って 木を 買っておいて 荷車で ずー

qto torimahite gaqko:~no simono mitino hata⁽³⁾-
っと 取りよせて 学校の 下の 道の した

ni:~hatakega aqtan arei korobasitjoitene:
に はたけが あったが あれに ころばしておいてね

arema[~]dja: dojara kojara toqtikit⁽⁴⁾joru hikite[~]ga
あそこまでは どうやら こうやら 取って来ているが 引く人が

nakaqtā[~]gajo soituo saNzjakū[~]gutiba: no mon[~]dja-
無かったのよ そいつを 三尺四方ぐらいの ものだ

ken saNzjakuno kakuba: no monoone: kakuni
から 三尺の 角ぐらいの ものをね 四角に

za:qto hatao ke[~]duqte saNzjakukakuno monoo
ざっと 側面を けずって 三尺角の ものを

soreo toqti kite hikite[~]ga⁽⁵⁾ nakaqtā[~]gajo dareq-
それを 取って 来て 引き手が なかったのよ 誰

tja: hikite[~]ga soreo hikunja: are ō[~]gajo⁽⁶⁾ are
も 引き手が それを ひくには ほら オガよ ほら

ō[~]gao are[~]dake emā[~]de sasiko[~]ndati denro ō[~]gano
オガを あれだけ 柄まで さしこんでも 出ないだろう オガの

taketumona: nisjakurokusunba:sika naiken sonde
長さというものは 二尺六寸ぐらいしか ないから それで

rjohirakara⁽⁷⁾ soituo zu:qto hikanja ika[~]ngajo
両方から そいつを ずーっと ひかなきゃ いけないのよ

rjohirakara sono: koqtjai⁽⁸⁾ ma:ri aqtjai ma:ri
両方から その こっちに まわり あっちに まわり

koqtjai ma:ri zu:qto hi:te ma: hutatuni
こっちに まわり ずーっと ひいて まあ 二つに

sitara sorja sijoiwa hutatuni sitara kondo
したら それは 容易だ 二つに したら 今度

hiqkurikaesitara mo: sjakū[~]gosundjake[~]ne: sorē-
びっくりかえしたら もう 一尺五寸だからね それ

ḍjaqtara ḍare[~]demo hikeru monjo sorja hazime-
だったら 誰でも ひける ものよ それは はじめ

no: saNzjakuno kakuno monoo huta·tuni suru
の 三尺の 角の ものを 二つに する

monō[~]ga nakaqtane:
ものが 無かったね。

se:kara ora: ma: hi:toi ōgao kozjanto nao-
それから おれは まあ 一日 オガを 十分 手入

hitjoite se-kara akoe ite hikijoru tjanto
れしておいて それから あそこへ 行って、 ひいていると、 ちょうど

do:rono mitidjakenne: ano butikara kono
道路の 道だからね あの 鞭から この
(地名)

kamisimosuru hitorāga kikakaqtara nanzo
上へ行き下へくだる 人などが 来かかったら 何かを

mirujo:ni tjanto kuroiba: hiton⁽¹³⁾ takaruba:
見るように ちゃんと 黒いぐらい 人が たかるぐらい

oran sigotoo sijoru tokorōde ora sotōga
おれの 仕事を している ところで おれは 外が

ijādjakēn ukeawazaqtakeno ma: anmari tju:ga
いやだから うけあわなかったけれど まあ あまり 忠が

naiti ma:ruken itjo-kanē: ju:te sekara hazi-
泣きついて くるから 行ってみようかね と言って それから 始

mete hondemo: hitotumo heti-jarandukuni
めて、 それでも すこしも わきへ そらさずに

nandjaqta kozjanto hiki hi:tene: arewa bu-
あれだって 思う存分 ひき、 ひいてね あれは 鞭
(言いさし)

tino tarō:ga tateta hi:simo:ta toki tarō:ga
の 太郎が 建てた ひいてしまった とき 太郎が

daikūdjakēn daikuwa taro:N jaqta nakanaka
大工だから 大工は 太郎が やった なかなか

korja riqpani dekitano: ju:ba:ni hitotumo
これは 立派に できたね というぐらいに すこしも

hetimojarandukunine: kozjanto hi:simo:ta
ひきそんじないでね 思う存分 ひいてしまった

koqtjaqtani ma: sono zibunnja:ne: kobikimo
ことだった まあ その 時分にはね 木挽も

taitja hutoikoto aqtakeno sore hiku mono
随分 たくさん あったけれど それを ひく ものは

nakaqtakenne: nandjati[~]đja kobikisitati
なかったからね なんでもだ 木挽しても

daikusitati nandjati soreba:na ūđeni: narumā-
大王をやっても なんでも それくらいの 腕に なるま

đja: egkoro urusai kotowa urusai soreba:none:
では かなり 苦しい ことは 苦しい それくらいのね

ūđeni narumāđewane: honmani: kobikīđjake[~]ndo.
腕に なるまではね ほんとに 木挽だけれど

nakuba:na meni sanbenba: awanja: songjanja
泣くくらいの 目に 三べんぐらい あわなきゃ そんなには

naren sono zibun[~]nja: sasimonno⁽¹⁴⁾ konna o:zasi-
なれない。 その 時分には 指物の こんな 大指

monno hitotama[~]đe zigtjo:đja zju:nitjo:đja
物の 一玉で 十町だ 十二町だと

ju^{*} waku sanzjakū[~]gutiba:no monowa sonna
いう わく 三尺直径くらいの ものは そんな
(このあたりはつきりしない)

riqpana monoo hiki hikitewa aqtati ukeawaza-
立派な ものを ひき ひき手は あっても うけあわな
(言いざし)

qtaneja sonna monowa urusai sonna si[~]gotowa
かったね そんな ものは うるさい そんな 仕事は

matuno matuno konna sasimonno hutoi monrawa
松の 松の こんな 指物の 大きい ものなどは

sorja sjo:sjo heti itati do:sitati maqto
それは 少々 わきへ それでも どうしたって もっと

sijoikendo a:ju: monowa honmani sumio ha[~]đu-
容易だけれども ああいう ものは ほんとに 墨(辯)を はず

hitara ugta sumio ha[~]đu hitara ikanto sitaba:-
したら うった 墨を はずしたら 使いものにならぬと したほどの

namondjane: hondemone: arja hiki jokaqtaka
ものだね それでもね あれは ひきよかったのか

kire:ni kozjanto hi:simo:ta tarō:ga angja
きれいに 思う存分 ひいてしまった 太郎が あのように

ju:takeN no: korja nakanaka kozjanto deki-
言ったら なあ これは なかなか たいそう(立派に) でき

tano: ju:te ju:ba:nja oran hi:tane: soreba:-
たなあと 言って 言うくらいには おれが ひいたね それくら

ni narō:~ditja kobiki ju:ken do kobikimo
いに なるうと思えば 木挽と いうけれど 木挽も

sijoi kota konmai mondjagtara kozetuketēdemo
やりやすい ことは 小さい ものだったら どうでもこうでも

hikukendo nakanaka kokona atarini oran sita-
ひくけれど なかなか この あたりに おれの 下

wa dakemaqkō:~djāga⁽¹⁵⁾ ju: kiwa mo: ikinasini
は 断崖だが (そう)いう 木は もう いきなり

kiqte tukokasujori⁽¹⁶⁾ hokani sijo: naikendo
切って つき落とすより ほかに しょうが ないけれど

sonna tokowa ma:: meqtani nai mondjaken me-
そんな ところは まあ めったに ない ものだから めっ

qtani nai mondjāga ko:ju: kīga taqtjoru
たに ない ものだが こういう 木が 立っている

dono kīdemōdjane: ko:ju: kīga taqtjoru to-
どの 木でもだね こういう 木が 立っている と

koo ko: jokosini kajahite sorekara rin⁽¹⁷⁾ kake-
ころを こう 横に 倒して それから 台を つくっ

te kēduranja ikaNro so:ju: kio kirunja:ne:
て 削らねば いけないだろう そういう 木を 切るにはね

kono: taqtjoru kino: taqtjoru kino jamano
この 立っている 木の 立っている 木の 山の

hiraniwa kanarazu kono nēga haqtjoruro
側には かならず この 根が 張っているだろう

motoni nēga ko: zu:qto kubaqtjoruro sono
元に 根が こう ずーっと 分岐しているだろう その

nenō kubarijo:ni joqtēdjane ano kio akoni
根を 分岐のしかたに よってだね あの 木を あそこに

kajaso: omo:tara jamae zuqto ho:tjoru neno
倒そうと 思ったら 山へ ずーっと 這っている 根の

kokoni zu:qto nēga to:qtjorukē kono kono
ここに ずーっと 根が 通っているから この この

neno kono turui⁽¹⁸⁾ korja totemo tīgireru moN-
根の この 根(?)に これは とても ちぎれる もの

dja naikeN koitui ukekutio kigte koitono
では ないから こいつに 受口を 切って こいつの

sitamāde kigtjoite kondo ōgao ko: sasikonde
下まで 切っておいて こんど オガを こう さしこんで

jokobikio⁽¹⁹⁾ kono koreo kigtara ikangajo do:si-
ヨコビキを この これを 切ったら いけないのよ どうし

tati sono turuni hikahitjoite koqtjakara
ても その 根(?)に ひかせておいて こちらから

jao⁽²⁰⁾ uqtara kono ukekutino kirijo:ni joqte
矢を 打ったら この 受口の 切りように よって

hitai jaro:to omoja ukekutio koqtjai ma:hi-
下に やろうと 思えば 受口を こっちに まわし

tjoku uei jaro:to omoja ukekutio koqtjai
ておく 上に やろうと 思えば 受口を こっちに

ma:hitjoite sorekara jao uqte jokobikiŋga
まわしておいて それから 矢を 打って ヨコビキが

zu:qto kakureruba:naqtara jao simetja. iki
ずーっと 隠れるぐらいになったら 矢を 締めては いき

mata hikijoqtja. jao simetja. iki site kono
また ひいていては 矢を 締めては いき して この

turūga mo: josito omou tokini jawa unto ki:-
根(?)が もう よしと 思う ときに 矢は うんと 利い

te ikijoqte kiwa ziri ziri ziri: kajaqti
て いっていて 木は じり じり じりー 倒れて

ikijorukē sorēde kono turūde hikahitara
いってるから それで この 根(?)で ひかしたら

mo: omou tokoe ika: omou tokoe boqtiri
 もう 思う ところへ 行くさ 思う ところへ ちょうど

sorēga ma: zitūd̄jane: ki: kirunja: horekara
 それが まあ 術だね 木を 切るには それから

sono: ko: naqtjoru tokorōde unto nāga nāga-
 その こう なっている ところで うんと なが 流
 (言いさし)

⁽²¹⁾
 hite kajahite kamawanto ju: jokosini senti
 して 倒して かまわないと いう 横に しなくても

nāgarete kajaqte kaman̄to ju: kiwa kono tu-
 流れて 倒れて かまわぬと いう 木は この 根

rui hikahitjoitara murin ikandukuni ziqto
 に ひかしておいたら 無理が いかずに じっと

kajari joikendone: do: sitemo kono kiwa joko-
 倒れよければね どうしても この 木は 横

sini senja ikan̄to omo: tara kono nakano tu-
 に しなければ いけないと 思ったら この 中の 根

rūde hikahite iaruto ju: ma: sorēga ma: ki:
 で ひかして やると いう まあ それが まあ 木を

kiru zituwa sokōdjane: sorēdjagtara ne kono
 切る 術は そこだね それだったらね この

turuno hikijo: ni joqte djo: buna turūd̄jagtara
 根の ひきように よって 丈夫な 根だったら

sorja omou tokoi kajarumō: giqtiri
 それは 思う ところに 倒れる もう ぴったり

so: site sono kinone kīga kajaqte jokosini
 そうして その 木のね 木が 倒れて 横に

kīga kajaqte kokoni kono asāgīga taqtjorūgā-
 木が 倒れて ここに この 雑木が 立っているの

d̄jane: asāgīga taqtjoru soituno utihirai ⁽²²⁾
 だね 雑木が 立っている そいつの 内側に

kajaqtato sotohirai ⁽²³⁾ kajaqtato sorja hutoi
 倒れたのと 外側に 倒れたのと それは 大きい

niniNjakumo tĩgauba: sono rin kakeruni ja-
二人役も 違うくらい その 台を つくるのに 手

kũga kakara: sono ki: sono kio aiteni hite
間が かかるさ その 木 その 木を 相手に して

sono taqtjoru kio aiteni site rino sasite
その 立っている 木を 相手に して 台を つくって

mata tuitara dikini ðekiru monõga kono ta-
また 枝を落としたら すぐに できる ものが この 立

qtjoru kijorika sotohirai kajaqtara naqtja:
っている 木より 外側に 倒れたら 何も

nai tokorõdjaqtara rino kunde tja:Nto jaq-
無い ところだったら 台を 組んで きちんと やっ

tjokana ikanro sono omowakumo unto aru mon-
ておかなければ いけないだろう その 思案も うんと 有る もん

jo sorja kino kajarijo:wa hutoi kĩdjaqtara
よ それは 木の 倒れようは 大きい 木だったら

kino kajarijo:ni joqtja mo: niniNjakumo
木の 倒れ工合に よっては もう 二人役も

tĩgauba: sono jakũga kakarukenne: mo: ki:
ちがうくらい その 手間が かかるからね もう 木を

kiruwa sorẽga zitujo
切るは それが 術よ。

orara:Nne taisjo:sonni oqte taisjo:sonno
わしらがね 大正村に 居て 大正村の
(地名)

tanonõga tju:sinde tanonono tamura ju tokõ-
田野々が 中心で 田野々の 田村と いう ところ
(地名)

ga jãdõdjaqta sokokara zu:qto kajo:te tuno-
ろが 宿だった そこから ずーっと 通って 津野
(地名)

jamae iku tunojamae ikunja: tanonokara kami:
山へ 行く 津野山へ 行くには 田野々から 上へ

ite o:naro ju: toqkara zu:qto sakao agariha-
行って 大奈路と いう ところから ずーっと 坂を あがりは
(地名)

zimetesorekara to:māde āgaqtara matubara
 じめて それから 峠まで あがったら 松原
 (地名)

tunoj amano matubara ju: tokoi no zaisjoi
 津野山の 松原と いう ところに、の 在所に
 (言いまちがい)

oriru jatate ju: nāndjane arja jatatesanrino
 おりる 矢立と いう なんだね あれは 矢立三里の

sakādjā sanrino sakao niriba: no aīdawa da-
 坂だ 三里の 坂を 二里くらいの 間は だ

rari darari darari darari sorekara to:māde
 らり だらり だらり だらり それから 峠まで

āgaqtara gaqkuri orira: waera: mukasino
 あがったら がっくり おりるさ。 お前たちは 昔の

jatate jatatetu: monoo sirumai jatatetumono-
 矢立 矢立という ものを 知るまい 矢立というもの

wane. konmai kono kono konmai kohūde ireru-
 はね 小さい この この 小さい 小筆を 入れる

ba: no taqpōdjane:
 くらいの 筒だね。

kaneno sorekara soitoi: hūdeo sasikonde
 金の それから そいつへ 筆を さしこんで

sorekara sokoni tubon arūgādjā sono jata
 それから そこに 壺が あるのだ その やた
 (矢立と言うつ)

sono koitono sakini kono ma:riba: no sumio
 その こいつの 先に この まわりくらいの 墨を
 もりてあろう)

igta tubōga aru soitoi huta soitoi hutao
 入れた 壺が ある そいつに 蓋 そいつに 蓋を
 (このあたり話に乱れがある)

tjoito hutao aketara hutao tjoito site hi-
 ちょいと 蓋を 明けたら 蓋を ちょいと して し

tara kono kokoi sahitjaru hūdemo den sono
 たら この ここに さしてある 筆も 出ない その

omoimo⁽²⁴⁾ konmai kono ma:riba: none: soituo ma:
 オモイも 小さい この 周りくらいのね そいつを まあ

tjoi tjoi ko ko ko: jamãde tjõ tjõ:qto ma:-
 ちょい ちょい こ こ こう ひもで ちょ ちょーっと まわ
 (言いよどみ) (言いざし)

hitjoite sorẽde kosi: sasitara mo: sorẽga
 しておいて それで 腰に さしたら もう それが

jatate soito ju:ta mondjane. sono eo zu:qto
 矢立 そいつを 言った もんだね その 柄を ずーっと

noboqte ite gakuri muko:e oritjoru soreo
 登って 行って がくりと 向うへ 降りている それを

jatate jatatesanrino saka imara areo to:ri-
 矢立 矢立三里の 坂 今は あれを 通ってい

jorantukendone: imara: sono: jusuwarakara
 ないというけれどね 今は その 樽原から
 (地名)

deta simantokai detjoru kaino hutio do:ro
 出た 四万十川に 出ている 川の ふちを 道路が
 (地名)

nukete areo basun ima kajoutukenne: ano
 抜けて あれを バスが 今 通うということだからね あの

jatateno to:rawa ima hitowa to:ru mon nai-
 矢立の 峠は 今 人は 通る ものは いない

zone: mukasiwa so:ju:jona tokowa itjonne:
 よね 昔は そういような ところは 行ったものだがね。

sonna zigtimo orara hundjorukendo sonna
 そんな 実地も おれらは ふんでいるけれど そんな

hanasio ima hiteno kotomo naiwa
 話を 今 しての ことも ないさ。

2. 漁師の思い出話

録音日時 1967年7月8日

録音場所 山本家(大方町田の浦)

話し手

(略号) (氏 名) (性別) (生 年) (職業) (居 住 歴)

H 浜田数義 男 明治43年生 教員 幡多郡大方町田の浦→高知市1年7か月
→佐川町3年→窪川町3年以後田の浦

Y 山本万助 〃 〃 23年生 漁業 大方町田の浦→大月町5年→善通寺3年
以後田の浦

解説：方言研究家が親しい漁師に大しけ、地震、出買船、「しき」の休日などについて回想的に語らせている。

H sorēde ko:to: sundekara dokoi do:sitāgādjag-
それで 高等(科)が すんでから どこに どうしたんだっ

taze ko:to:dja nai zinzjo: sundekara
たの 高等じゃ ない 尋常(科) すんでから

Y zinzjo: sundekara onda: onra: nanijojo diki-
尋常 すんでから おれは おれは あれだ すぐ

ni: ano: utide itinenka ninenka utino rjo:-
に あの うちで 一年か 二年か うちの 漁

si sijoqteneja (H ū:) sorekara sono zibun-
師を していてな それから その 時分

nja minajo ma: onra:~datekara⁽¹⁾ ueno monowa
には 皆よ まあ おれぐらいの年格好から 上の 者は

minato ju:ba:~djaqtane: utidja: zenin toren-
皆と いうぐらいだったね うちでは ぜにが 取れない

kenneja ponto⁽²⁾ hanamai⁽³⁾ (H ū:) ano. katuobune-
からだな 全部 鼻前に あのう かつお舟

no idetori ikumona idetori iku sekara sango-
の えさ取りに 行くものは えさ取りに 行く それから 珊瑚

z j u m o i k u m o n a s a n g o z j u n i i k u k a t o n i i k u m o n a
 珠も (取りに)行く者は 珊瑚珠(取りに) 行く 鯉(漁)に 行く者は

k a t o n i i k u n e j a (H ũ:) t a i t e : n i t a w a r ē g u n o
 鯉(漁)に 行くさ たいてい 行った お前のうちの

a i j o r a n k o m a i t o k i w a n e j a
 兄らが 小さい ときはさ

H s a n g o z j u n i n i : t a j o : n a n o . s o n o : z i b u n s a n g o z j u
 珊瑚珠に 似たようなのう その 時分 珊瑚珠は

u n t o t o r e t a k a e
 うんと 取れたかい

Y t o r e t a t o r e t a t o r e t a k e n d o n e j a d ō : d e h u n e a :
 取れた 取れた 取れたけれどだなあ どうせ 舟は

k o z a i t u n ō d e m o h j a q p a i ⁽⁴⁾ a q t a k e n n e j a
 小才角でも 百艘 あったからなあ
 (地名)

H s a n g o z j u b u n ē g a j a (Y ũ:) k o z a i t u n ō d a k e d e
 珊瑚珠舟がね 小才角だけでも

Y h u n e a (H ũ:) s a n g o z j u n i j u k u h u n e m o t a r u
 舟は 珊瑚珠(取り)に 行く 舟も ある

k o m a i h u n e m o a q t a h j a q p a i a q t a n e j a (H ũ:)
 小さい 舟も あった 百艘 あったなあ

s o r ē g a : n a n d j a q t a z o i t i n e n n e j a j o n z j u ⁽⁵⁾ n a n n e -
 それが あれだったよ 一年だな 四十 何年

N d j a q t a k a n e j a a n o . o . s i k e n o n i n j a n e j a (H ũ:)
 だったかなあ あのう 大しけの 日にはなあ

s o n o h u n e a o : k a t a n e j a t u k a u e r u h u n e a i q p a i m o
 その 舟は 大方 使う える 舟は 一艘も

n a i j u : b a : i t a m u i t o : d o j o (意味つづく。言いなおし)
 無いと いうぐらい いたむ いたんだよ (H n a n d e j a) s i k e -
 (意味つづく。言いなおし) なぜだね しけ

n i n e j a (H ũ:) u t i r a : n o h i t o r ā : g a m o : u n t o
 のためさ うちなんかの 人たちが もう うんと

s i n d a . ⁽⁴⁾ j a k o ⁽⁶⁾ k a m e t a ō d i : n e j a i m a n o j a t ā g u n o
 死んだじゃないか 亀太おじだな 今の 弥太のうちの

ojādīdja ju:teneja
おやじだと 言っただな

H jonin sinda ju:te ju:tanowa sono tokikae
四人 死んだと 言って 言ったのは その 時かえ

Y ū: sono tokīdja
んー その 時だ

H utirāḍakeḍeno:
うちらだけでなあ

Y sorekaraneja kainoka:no seinenra:neja (H ū)
それからだな 貝の川の 青年らがだな
(地名)

naNdja:qtojo sono sangozjutori wakaisjūga
あれだったな その 珊瑚珠取り(に) 若い衆が

toriīāgeni iteneja (H ū:) minatoe hamaqtjoq-
取りあげに 行っただな 港に はいっていて

teneja (H ū:) ano: namīga huto: naqte hunē-
だな あのう 波が 大きく なって 舟

ga uti: hikenkeni ti:ro ju: minatoeneja (H
が 中に ひけないから 千尋と いう 港へだな
(地名)

ū:) ma:sijoqte sono huneo kozaitunōde ano:
廻していて その 舟を 小才角で あのう

H kainoka:no hune
貝の川の 舟

Y kainoka:no hune sanninnorīga oki muite naga-
貝の川の 舟(で) 三人乗りが 沖に 向いて 流れ

rejoqtāgajo horja mōdorandukujojo (H ū:)
れていたのよ ほら もどらずじまいよ

minatoe hamaqtjoqteneja
港へ はいっていてだな

H hamaqtjoqtekara
はいっていてから

Y uti: hunēga ikenkeni tihiro ju: tokono mina-
内部へ 舟が 行けないから 千尋と いう ところの 港

tōga e: minatōdeneja kokokara honno mietjo-
が よい 港でだな ここから ほんの 見えてい

ru tokorōdjakenneja (H ū:) sju:qto itara
る ところだからなあ さっと 行ったら

e: tokoro⁽⁷⁾ hokoi iko: omo:te ita sokoe jo:
よい ところを そこに 行こうと 思って 行った (が)そこへ 行かれ

ikan jamāgita ju: are jamakara ko: hukiḍasu
ない 山北と いう あれ 山から こう 吹きだす

kazeni oki muite nāgasare simo:ta⁽⁸⁾
風に 沖 向いて 流されて しまった

H ū: mōdoranduku
んー もどらないで

Y mōdoranduku
もどらないで

H seinen sannin
青年 三人

Y rokuni
六人

H rokuningae
六人がね

Y nihaīdjaqtakenneja
二艘だったからなあ

H ū: sannindutūde nihaitomo nāgarete simo:ta
んー 三人ずつで 二艘とも 流れて しまった

Y nāgarete simo:ta
流れて しまった

H atono disinjono: oki: oqta ano tokini
後の 地震よねえ 沖に 居たの あの ときに

Y ano tokini. sono: tateisino oki: orimasitani-
あの ときに そのう 立石の 沖に 居りましたに
(地名)

no: .hunei nejoqtāga soremo.
ね 舟に 寝ていたが それも

H hunēde nejoqta ū:
舟で 寝ていた んー

Y soremāde koamitate horja amitatēni itjoqte
それまで 小網立て ほら 網たてに 行っていて

(H ū:) amēga boroboro siteno (H ū:) āgero:
雨が ぼろぼろ して あげようと

omo:te mōdoro: omo:te amēga boroboro sita
思っ て もどろうと 思っ て 雨が ぼろぼろ した

a: mo: hitokuti nejo ju:te neta tokorōga
ああ もう ちゃんと 寝ようと 言っ て 寝た ところが

(H ū:) sorekara sono tokini toqtara ondara
それから その ときに 取ったら おれたち

do:jara wakaranga djaqtaneja (H ū:) sorekara
どうやら わからんのだったなあ それから

toqtene: ano: nejoqte hitokuti okite toqtā-
取っ てねえ あのう 寝ていて ちゃんと 起きて 取った

gādja: (H ū:) disinwa djaqtamonjo hokano
のだ 地震は だったもんよ ほかの
(発音ははっきりしない) (意味つづく)

jama: guzāguza guzāguza kueru ano: umiwa
山は ぐざぐざ ぐざぐざ くずれる あのう 海は

ko: ue sita ue sitaneja hunēganeja honmani
こう 上 下 上 下 舟がだな ほんとに

iqsjakuba: moti āgaqtari oritari sitaneja
一尺ぐらい もちあがったり おりたり したなあ

(H ū:) sorēga ano: sono tokino tunamino
それが あのう その ときの 津波の

omōdja sorekara susakino okīga pa:pa:to ni-
中心だ それから 須崎の 沖が パーパーと 二

sanben akagtanneja
三べん 明るくなったなあ

H ū: susakino okīgaja
んー 須崎の 沖がな

Y ũ: (H ũ:) ano nādani orunineja ara susaki
 んー あの 灘に 居るのにだな あれ 須崎に

o:kena gunkanga kitjoruneja i:joqtāga sorē-
 大きな 軍艦が 来ているなあと 言っていたが それ

ga omōdjaqta sorēga hazimēdjaqta (H ũ:)
 が 中心だった それが 始めだった

itiban sono nisiwakinoneja
 一番 その 西脇の(山)のだな

H disinwa sirandukujono:
 地震は 知らないでいたのだね

Y sorekara nandja:qtazo āgete montajo monta
 それから あれだったよ (網をひき)あげて もどったよ もどった

tokorō:ga sorekara jōga aketeno: okakarano
 ところが それから 夜が 明けてなあ 陸上からの

hitorā:ga kowaizo kowaizo kowaizo ju:te
 人たちが こわいぞ こわいぞ こわいぞと 言って

sjakerijoru
 叫んでいる

H kowaizo ju:te
 こわいぞと 言って

Y kowaizo ju:te
 こわいぞと 言って

H nādano hitorā:gano
 灘の 人たちがね

Y ũ: nādano kowaizo ju:te sjakerijorukenne:
 んー 灘の(人が) こわいぞと 言って 叫んでいるからね

o: orite mōdorijoqta tokorō:ga siomino sio-
 お、 おりて もどっていた ところが 潮干の 潮
 (言いさし) (このあたりすこしづつだが

no tataēgani ano: haino aiāda hune to:ru
 の 満ちたときに あのう 岩礁の 間(に) 舟の 通る
 合わぬ)

to:ru tokorōga arūganeja sokōga ka:rani
 通る ところが あるのだが そこが 川原に

naqtjorutu: kotōdeneja orijo korja do:ju: (9)
 なっているという ことでだな あれ これは どういう

kotōdjaroneja ōnda: soremāde sonna kota
 ことだろうなあ おれは それまで そんな ことは

sirazaqtanne: (H ū:) do:ju: koqtjaroneja
 知らなかったねえ どういう ことだろうなあ

korja warja to:renro:ka sorekara oki. ma:qte
 これは わしは 通れないだろうが それから 沖を 廻って

monte simōdano oki itara honno (10) simōdani so-
 もどって 下田の 沖(に) 行ったら ほんに 下田に そ
 (地名) (地名)

no hamaru mīduganeja (H ū:) anna toko unto
 の はいる 水がだな あんな ところは うんと

hamarukeNneja go:go: i:joru o:rjo* korja ko-
 はいるからだな ゴーゴーと 音をたてている あれ これは こ

waizo kowaizo ju:te (H ū:) oki: ma:qte mon-
 わいぞ こわいぞと いって 沖に 廻って もどっ

te se:kara ijano oki. montara jōga aketa
 て それから 伊屋の 沖に もどったら 夜が 明けた
 (地名)

(H ū:) tokorō:ga ponto sono nanijo kiribosi
 ところが 全部 その あれだ 切干の

kiqtja:rūgao tūndanarīdeneja (H ū:) okie
 切ってあるのを 積んだままでだな 沖へ

nāgarejoru ju:tuwa nanbōguramo (11) sorekara
 流れていると いうことだ 何くらかも それから
 (発音不明瞭)

utino oki: montā tokorō:ga sono nanīdja:to
 うちの 沖に もどった ところが その あれだった

sitorino monganeja hāgiriijara (12) nanikaja ta-
 潮取りの 者がだな はぎりやら なにかや た

nsūdja: nandja: tansuwa kokono
 んすだの 何だの たんすは ここの

H jamasanno (13)
 やまさんの

Y jama^sanⁿno g[~]ad^jaq^ta⁽¹⁴⁾ mon^dja (H ũ:) h[~]agⁱri^jara
 やまさんの のだった もんだ はぎりやら

nanⁱja honⁿno tuk^ani na^qte n[~]ag^are^jor^ukenⁿne^ja
 なにやがほんとに 塚に なって 流れているからだな

(H ũ:) so^rek^ara on^da: h[~]agⁱri^o naⁿd^ja:q^to: e:
 それから おれは はぎりを あれだった よい

h[~]agⁱri^o mi^qtu hi^ro:te ki^te to^qte a[~]ge^tja·q^ta
 はぎりを 三つ 拾って 来て 取って あげてあった(が)

so^re do^kono g[~]ad^jaq^taka to^rare^ta so^rek^ara ko-
 それは どの のだったか 取られた それから こ

ko[~]d^ja nai i^mano to^jo[~]dⁱno jo^si^mak^uno ma^eni-
 こで ない 今の 豊おじの(息子の) 芳馬のうちの 前に

ne^ja (H ũ:) ko^ami o^rosi^taⁿne^ja (H ũ:) naⁿ-
 だな 小網を おろしたんだな あれ

d^ja:q^to^jo koⁿo on^da[~]ga moⁿta huⁿja: poⁿto
 だったよ この おれが もどった 舟は 全部

n[~]ag^are si^mo:te o^ki: o^ran^ken (H ũ:) o^kae
 流れて しまつて 沖に いないか 陸へ

jo^ru[~]ga: jo^rune^ja (H ũ:) on^dara: moⁿta huⁿe-
 寄港するのは 寄港するなあ おれたちが もどった 舟

wa^ami o^rosi^tjoⁱte soⁿo huⁿe miⁿa hi^rai
 は 網を おろしておいて その 舟を みな 拾いに

i^to^jo
 行ったよ

H a: o^kiⁿi n[~]ag^are^ta[~]ga^o (笑声) so:kae so: hoⁱta-
 あー 沖に 流れたのを そうかえ そう そした

ra ko^saⁿra: ⁽¹⁵⁾ huⁿe i^qpaⁱd^jaq^ta mo: taⁿour^ade
 ら あなたたちの 舟は 一艘だった? もう 田の浦で

Y ni^haⁱd^jaq^ta^jo soⁿo ko^ami[~]ga^bun^egaⁿe^ja ni^haⁱd^ja-
 二艘だったよ その 小網舟がだな 二艘だ

q^ta^jo
 ったよ

H kosa^N huneto dare
あんだの 舟と 誰

Y ano: ora^N aijora·toneja onda:rato nihaĩđjaqta
あのう おれの 兄貴たちとだな おれたちと 二艘だった

H ũ: ju:te⁽¹⁶⁾ jonetja^Nkano (Y ũ:) mo: tanourāde
んー まあ 来ちゃんかね もう 田の浦で

nāgarete simo:te sono nihaⁱsika
流れて しまつて その 二艘しか

Y ponto nāgare simo:tj^oqta (H ũ:) joruga:
みんな 流れて しまつていた 寄港するのは

joruneja (H ũ:)
寄港するなあ

H sorēde zenbu hiro:te kuru kota hiro:te ki-
それで 全部 拾つて 来る ことは 拾つて 来

takae
たかね

Y hiro:temo kuruneja (H ũ:) hokano hunja·kū-
拾つても 来るさ ほかの 舟は く

đaketa hunemo aqtake^Ndoneja
だけた 舟も あつたけれどな

H hune: sono tokini: sono o:namĩga kite utira:
舟 その ときに その 大波が 米て うちなど

jamasa^Nno iēga nāgareta tokijono: (Y ũ:) sore-
やまさんの 家が 流れた ときよねえ それ

kara kokono maeni ano: zjakōgojāga aqtāga nakama-
から ここの 前に あのう じゃこ小屋が あつたが 仲間

no arera:mo zenbu nāgarete simo:ta tokijono:
の あれなども 全部 流れて しまつた ときよねえ

Y nāgareta
流れた

H sono tokini hitowa itamja seraqtakano:
その ときに 人は 損害は なかつたかねえ

Y ũ: hitowa jamasa^Nno ba:ga sindabā:đjaneja
んー 人は やまさんの 婆が 死んだくらいだな

H jamasaNno oba:sanwa arja sindjoqte jotōgisijoqte
やまさんの お婆さんは あれは 死んでいて お通夜をしていて

nāgaretagāḍja nakaqtakae arēde sindakae (騒音)
流れたのじゃ なかったかね あれで 死んだかね

Y jotōgisijoqtēḍja nakaqturo arja: daitaiwa jo: ī-
お通夜をしていてでは なかっただろう あれは 大体は 動け

gōkanjo:ni naqte warikaqtāgāḍjaqtakenno: jo: īgo-
なく なって 悪かったのだからねえ 動け

kanjo:ni naqte nāgarete sindāgāḍjano
なく なって 流れて 死んだのだ

H a so:kae
あ そうかい

Y utiāgettjoqtāgāḍjano
うち上げていたのだ

H ū: so:kae ū: dēgaiwa omoni donna: koto sitaze
んー そうかい んー 出買は おもに どんな ことを したの

Y dēgaiwaneja (騒音) kokowa hitotumo nai tokiḍjaqtā-
出買はだな ここは 少しも 無い ときだった

ga hamāḍjaqtakenneja (H ē:) zu:qto koqkaraneja
が 浜だったからなあ ずうっと ここからだな

(H ē:) nandja:qto dēgaiwa ima iwasio kūgātukara-
あれだった 出買は 今 いわしを 九月から

neja (H ū:) seqkiiqpaiwa taite iwasi kaini ita
だな 大晦日いっぱい たいてい いわしを 買いに 行った

urumeoneja
うるめをだな

H dokoie
どこへ

Y ijokaraneja (H ū:) hjū:ḡaneja (H ū:) omo ijo hjū:-
伊予からだな 日向を おもに 伊予 日向

gāḍjaqtaneja (H ū:) onda: naninimo itajo genkaini-
だったな おれは 玄海にも 行ったよ 玄海に

moneja (H e:) genkaināḍdanimō ito:jo
もだな 玄海灘にも 行ったよ

H iwasi kainija (Y ū:) ū: genkaināḍa hukuokano
いわしを 買いにか んー 玄海灘(と言え) 福岡の

atarikano
あたりかな

Y o: hukuokano tjoqto temaeno iwaja ju: tokō-
おう 福岡の ちょっと 手前の 岩屋と いう ところ
(地名)

ga omōdjaqtaneja
ろが おもだったな

H ū: hoitara tusima atarimo itakano aqtiwa
んー そしたら 対馬 あたりも 行ったかね あっちは

Y aqtiwa ikan
あっちは 行かない

H ū: hoitara juwajāga ma:
んー そしたら 岩屋が まあ

Y juwajamādedjaqta juwaja ju: tokōdjaqtaneja
岩屋までだった 岩屋と いう ところだったな

(H ū:) akowa sono tokinja kisjāga kijoqtan-
あそこは その ときには 汽車が 来ていた

neja (H ū:) ano itibanwaneja (H ū:) ninaiga
なあ あの 一番はだな 担いの漁商が

ko:teneja (H ū:) nibanwa kisjāga ko:te (H
買ってだな 二番は 汽車(で運ぶ商人)が 買って

ū:) sanbanwa sono daitaiga sono itiban han-
三番は その 大体が その 一番 半

neba:ni naru tokidjaqtaneja (H ū:) minnana
値ぐらいに なる ときだったな みんなの

tuboe nanisitara o:kena homairae tundarineja
壺へ あれしたら 大きな 帆前船へ 積んだりだな

(H ū:) ondarā tumu hunewa ma: nisenanganba:
おれたちの 積む 舟は まあ 二千貫くらい

tumu hunēdjaqtaneja
積む 船だったなあ

H dēgaigaja (Y ū:) nisenangan tumetaka are so-
出賃舟がな 二千貫 積めたか あれ そ

re: namao kaugaiono:
れ 生(の魚)を 買うのよなあ

Y namao ko:te
生を 買って

H ko:te sorekara do:
買って それから どう

Y sio hiteneja
塩 してだな

H ũ: taru moqti ite
んー 樽 持って 行って

Y tarũdja: ikaNken inãgara kãnkoe sio irete
樽では いけないから そのまま (漁船の)生簀へ 塩を 入れて

toqte monte
取って もどって

H ho: kãnkoe sonomamano (Y ũ:) utimaãde toqte
ほう 生簀へ そのままの うちまで 取って

montakae
もどったかい

Y ũ: uti: toqte monte sono tokinineja (H ũ:)
んー うちに 取って もどって その ときにだな

iqpaĩde nanbu mo:ketato ju:tara sanninde
一艘で いくら 儲けたかと 言ったら 三人で

noqte ite joqtariwakẽdjaqtakenneja gozju:en
乗って 行って 四人分けだったからだな 五十円

aqtakenneja hitoko:kainineja
あったから 一航海にだな

H soitara nihjakuen mo:ketajaika
そしたら 二百円 儲けたじゃないか

Y u: nihjakuen
んー 二百円

H hunewa (hoitara) hitoribuNni naru ũ:
舟は (そしたら) 一人分に なる んー

Y sono tokini.no: gozju:en ju:itaraneja rokueN-
その ときの 五十円と 言ったらだな 六円

djaqtakenneja hĩga ondarã:ga hĩjo:ni kakaru
だったからな 日が おれたちが 日傭に かかる

tokinja:neja
ときにはだな

H hĩga tukĩdjãrõgae
日が? 月だろうな

Y tukĩga tukĩga rokuenjo niziqsendjaqtaken
月が 月が 六円よ 二十銭だったから

H hĩga
日が

Y hĩga (H ũ:)
日が

H tukino hĩjo:ga rokuende ũ: honnara a: jatu-
月の 日傭が 六円で んー そしたら あー 八

kibunjono: hitoko:kaiĩde hitoko:kai nanniti-
月分よなあ 一航海で 一航海 何日く

ba: kakaqtaze
らい かかったの

Y ano: sjo:gatuno: zju:hatiniti sunde iteneja
あのう 正月の 十八日 すんで 行ってだな

(H ũ:) nĩgatuno soko ita tokinja nĩgatuno
二月の そこへ 行った ときには 二月の

nakãgoroni montaneja
中頃に もどったさ

H ũ: juwajae ita tokinja
んー 岩屋へ 行った ときには

Y hitotukiba: kakaqtano:
一月くらい かかってなあ

H hitotukiba: kakaqtano:
一月くらい かかってなあ

Y songiani mo:keru tokimo arukendoneja (H ũ:)
そのように 儲ける ときも あるけれどだな

ano: hju:~gano simanoura ju: tokode tunda
 あのう 日向の 島の浦と (地名) いう ところで 積んだ

tokinja: neja (H u:) kugatuno maturidjaqta
 ときにはだな 九月の 祭りだった

kugatuno zju:~gonitimaedjataga ko:tja: sjanto
 九月の 十五日前だったが 高知は 残念にも

jasu:N naqteno: (H u:) ko:ti tunde kuruga
 安く なってなあ 高知へ 積んで 来るのを

sono~ga ho hosi: jaqta (H u:) mo: ikankeN
 その ものを ほ 乾しに やった もう いけないから
 (このあたり発音不明瞭)(言いさし)

korja hirosimae iko:zeja jute hirosimae
 これは 広島へ 行こうよと 言って 広島へ

itaga hirosimadja: nandja:qtazejo hjakuenba:
 行ったが 広島では あれだったよ 百円くらい

songa ita kotomo arukenneja (H u:) sorekara
 損を した ことも あるからなあ それから

mata modorisinani uti modorandukuni zu:to
 また もどる途中で うちに もどらずに ずうっと

ijode ko:te kondo sono ga ko:ti moteita
 伊予で 買って 今度 その ものを 高知へ 持っていた

sorede sono son toqte (H u:) torikaesita
 それで その 損を 取りかえして 取りかえした

kotomo aru sondjaken sjo: baiwa jutati ika-
 ことも ある それだから 商売は 言っても 駄

na:ja (H u:) sonno iku tokimo arukenneja
 目だよ ときも あるからなあ

H so:~djano: gozju:en mo:ketemo sonsuru kotomo
 そうだなあ 五十円 儲けても 損をする ときも

aru sono totju:~de siken i o:tari suru koto
 ある その 途中で しけに あったり する ことは

nakaqtakae degaibunemo sono: kikaibunedia
 無かったかね 出買船も そのう 機械船では

naike: unto kikenna meni o:turogae
ないから うんと 危険な 目に あっただろう

Y ū: taigaineja hijori miteneja ano: e: mina-
んー 大概だな 日和を 見てだな あのう よい 港

toe hamerukenneja (H ū:) nanijojo hijoriiga
へ 入れるからな あれだ 日和が

suwaranja: dete ikankenno: a sono zibunnja-
固まらなければ 出て 行かないからなあ あ その 時分には

ne: (H ū:) sondjaken heqsani kakaqtāgādjaken
ねえ それだから 久しく かかったのだから

wari: hijorinja:.....
悪い 日和には

H a: kju:sju:māde ikuni hitotuki kakaru jū:ga
ああ 九州まで 行くのに 一月 かかると いうが

sonna koto aruke: maqsūgu iketara sonnani
そんな ことが あるかい まっすぐ 行けたら そんなに

hitotukimo.....
一月も

Y kowai omo:tarano: bajo: minato torukenno:
こわいと 思ったらなあ 早く 港へ 入るからなあ

doko dokoi itara e: minato arutu: kotōga
どこ どこに 行ったら よい 港が あるという ことが

wakaqtjorukenno: (H ū:) sorekara kono sorē-
わかっているからなあ それから この それ

de atira ju:tarano: tjō:do kono ijoe hamaq-
で あちらと 言ったらなあ ちょうど この 伊予へ 入っ

tara nanīdjano: tosawa sonna koto naikendo
たら あれだな 土佐は そんな ことは ないけれど

ijoe hamaqtara sono kaigaNwano: kaiganno
伊予へ はいったら その 海岸はなあ 海岸の

siōga nanijono:si kono o:kena ka:no se:gurai
潮が あれだね この 大きな 川の 潮ぐらい

ikukēnno:si sono miteino siōgano:si (H ū:)
流れるからねえ その 満干の 潮がねえ

sonde sioni hikasukēnno taiḡai sono siōdja-
それで 潮に ひかすからなあ たいがい その 潮だ

qtara dokozoni ikuto ju: kotōga kazēga sjo:-
ったら どこかに 行くと いう ことが 風が 少

sjo: wari:temone.⁽¹⁷⁾ (H ū:) jarukenneja (H ū:)
々 悪くてもねえ 舟を出すからなあ

sio kuqte sondja:keni siono wari: tokinja:
潮を 計算して それだから 潮の 悪い ときには

nanijo kazēga jo:nakerjanja kazēga wari:
あれだ 風が よくなければ 風が 悪いと

ju:tara nanijo sio kuqte jarukēn sono zika-
言ったら あれだ 潮を 計算して 出すから その 時間

ndeneja imakara kono siōdjaqtara kondono
でだな 今から この 潮だったら 今度の

siowa dokemāde ikerukendo sjo:sjo:wa ano
潮は どこまで 行けるけれど 少々は あの

kazēga wari:temo jarerukēn jaro:kanejatujo:-
風が 悪くても 出せるから 出そうかなあというよう

ni jaqpari sio kuqte jaqtakenneja
に やっぱり 潮を 計算して やったからなあ

H sonnani sio hikijorukajo akowa⁽¹⁸⁾
そんなに 潮が ひいているかね あそこは

Y hikijoru (H e:) kowai zo go:go: go:go
ひいてる こわいぞ ゴーゴー ゴーゴー

H sonnara sono siōga gjakuno tokinja: nakanaka
そんなら その 潮が 逆の ときには なかなか

hunja ikana:no:
舟は 進まないなあ

Y ikankenneja
進まないからなあ

H ũ: hoNdara sioni norujo:ni ikisimōdori
 んー そしたら 潮に 乗るように 行き帰りを

kaNgaete zi kaN kaNgaete jarūgajono: <Y-a: so:>
 考えて 時間を 考えて やるのよねえ ああ そう

ū: kizituono: ⁽¹⁹⁾ mukasiwa asakara jasumidjaq-
 んー 式日よなあ 昔は 朝から 休みだっ

turoe
 たろう

Y mukasja jasundaneja ano: mukasikara ima
 昔は 休んだなあ あのう 昔から 今は

joke jasumankendoneja (H ē:) mukasinja ro-
 あまり 休まないけれどだなあ 昔は 六

kugatuhi:toito
 月一日と

H rokūgatuhi:toiwa do: ju:te jasundaze
 六月一日は どう 休んだぜ

Y seqkūdja ju:te jasundaneja korja ano rokū-
 節句だと 言って 休んだなあ これは あの 六

gatuwa
 月は

H nanno seqku ju:te
 何の 節句と 言って

Y seqku ju:te ju:kendo orara: koziwa wakaraN-
 節句と 言って 言うけれど おれたちは 故事は わからない

kendo nandjaneja jaqpari rokūgatuni naqtara
 けれど あれだな やっぱり 六月に なったら

(jasumitaiken jasundaro:) mo: (笑声) (sjo:ga-
 [休みたいから 休んだろう] もう [正月
 (女の声速くから)]

tuga sorekoso iqsju:kanba: mukasi aqtatūdja-
 が それこそ 一週間くらい 昔 あったというじゃ

ika) rokũgatu rokũgatuno tukinja miqkaba:
ないか) 六月 六月の 月には 三日くらい

jasumiġa aqtakenno zju:hatiniti zjũ:gonitiwa
休みが あったからね 十八日 十五日は

H zju:hatinititone: ũ:
十八日とねえ んー

Y sitiġatuni naqtara nĩdoneja tanabatasa nto
七月に なったら 二度だな 七夕さんと

bontõde bonwa miqka jasunde (H ũ.) onda: no
盆とで 盆は 三日 休んで おれたちの

tokinja miqkaĩdjaqta sono maenja iqsju:kanmo
ときには 三日だった その 前には 一週間も

jasundari suru kotomo arukendoneja (H ũ:)
休んだり する ことも あるけれどだな

H sono:: ma: jo: jasumiġa aqtãga nani jui⁽²⁰⁾ son-
そのう まあ よく 休みが あったが 何かい そんな

na tokubetuni kimaqta sikisikino jasumi
な 特別に きまった 式日式日の 休み

ĩgainimo amãgoĩdja: nandja: ju:te unto jasui-
以外にも 雨ごいだ なんだと 言って うんと 休み

mĩga arja: sezaqtakae mukasja
が ありは しなかったかね 昔は

Y aqtojo mukasjaneja
あったよ 昔はだな

H bjo:kino hajaqta tokinimo sonna kotõga arja-
病気の はやった ときにも そんな ことが あり

sezaqtakae
はしなかったかえ

Y bjo:kino
病気の

H sekirĩdosi ju: ga: siqtjorukae
赤痢年と いう のを 知っているかね

Y ū:a siqtjoru
んーあ 知っている

H sono sekirĩđosinja: nanika tokubetuni jasuu-
その 赤痢年には 何か 特別に 休

Nda koto naikae
んだ ことは ないかえ

Y tiqtomo siran nainika:ran
少しも 知らない どうもないらしい

H utirā:đja mukasi ano: bjo:kini naqta tokini
うちなんかでは 昔 あのう 病気に なった ときに

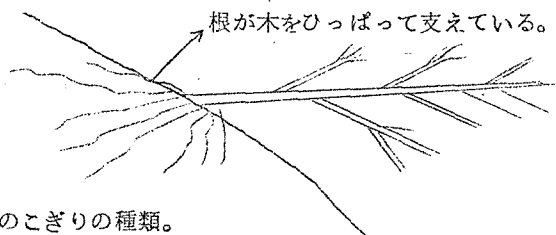
gokito: jaqtono:
御祈禱を やったよ。

注

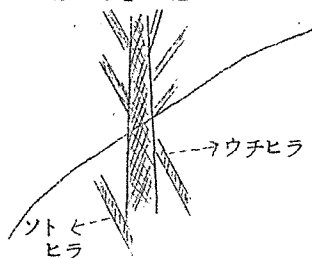
1. 木挽閑談

- (1) [p. 5] ku ところ, うち, 家。よきこい節に“いうたちいかんちやおらんくの池にゃ…”がある。
- (2) [p. 5] 官公地, つまりここでは, 国有林。
- (3) [p. 5] hata は共通語だからそのまま直訳したが, 私見によれば, ほんのわずかだが, 方言的なにおいがあるようにも感ずる。
- (4) [p. 6] toqti kitjoruと切り離す。(訂正)共通語の「て」「で」に当たるところに/ti//di/があらわれる。この現象は大方町でも, 万行(まんぎょう)・鞭(ぶち)(厳密には「浮鞭」)・加持(かもち)・湊川(みなとがわ)などの部落に限られており, それも主として老年層の間に見られる。
- (5) [p. 6] [k] が脱落している。
- (6) [p. 6] ōga のこぎりの大きいもの。
- (7) [p. 6] hira 方, 側。
- (8) [p. 6] 地点・目標などをあらわす「へ」に相当するものに/i/ があらわれる。土佐清水市・大方町・高岡郡旧長者村などで使用される。

- (9) [p. 7] saogu or sawagu あちこちかけずりまわる。
- (10) [p. 7] tanmetima:ru を意図したものであろう。tanmeru or tanneru さがす。
- (11) [p. 7] sinasu 物をつくりあげる。
- (12) [p. 7] 木に墨の線をつけるのである。
- (13) [p. 8] 主格をあらわす助詞。
- (14) [p. 9] 長いたけの木を意味しているようである。
- (15) [p.10] dake ①断崖 ②石まじりの土。dake が独立して使われることもある。
- (16) [p.10] tu は接頭語。
- (17) [p.10] rin 一種の枕木。
- (18) [p.11] 山の傾斜地に立っている木ゆえ、その木が倒れる際など根が藁のようになってひっぱる働きをする。それで、根を turu と言ったものであろう。



- (19) [p.11] のこぎりの種類。
- (20) [p.11] 立木を切った際、木の重心がのこぎりにかかって来るので、それを避けるために切り口に挿入するもの。
- (21) [p.12] nagasu 「下へ落とす」の意。
- (22) [p.12] 立木の上側。
- (23) [p.12] 立木の下側。
- (24) [p.14] つばの一種か。



(追記)

- * [p. 9] 一種の植木のように、注17の rin と同じような意味らしい。
- ** [p.11] 「受口を切る」は倒そうと思う方の側に斧を入れること。
- *** [p.13] [koso] に近く聞こえる。

2. 漁師の思い出話

- (1) [p.16] *date* は「年配」の意。「達」のなまったものようであるが、単なる複数でなく、「年齢層」の意味に重心がうつっている。(浜田数義氏説)
- (2) [p.16] *ponto* (全部) は、筆者も少年時代長岡郡後免町(現在南国市)近傍でよく使用した。類語に *neNgoro*; *suqtoN* があった。
- (3) [p.16] *hanamai* 足摺岬周辺をいう。
- (4) [p.17] *pai* は、舟を数える単位。須崎市あたりでも使用。
- (5) [p.17] *jonzju:* の前に *meĩdi* が、ごくかすかに入っている。
- (6) [p.17] *sinda:ĩjaiko* を目指しているが、*d* と *i* が *silent* になっているし、*ko* もはっきりしない。
- (7) [p.19] もちろん *tokoro:* と表記すべきかもしれぬが、仮りにこのように表記しておく。
- (8) [p.19] このような場合、幡多方言では助詞の *te* が顕現しないことが、しばしばある。
- (9) [p.22] *do:* *ju:* と分けて書くことが考えられる。
- (10) [p.22] 浜田数義氏によれば、*hoNno* は、副詞であるが、実質的には感動詞に近いという。
- (11) [p.22] *kura* は、野菜などの株を数える単位。
- (12) [p.22] *hagiri* たらいの形で、更に大型の桶。
- (13) [p.22] *jamasaN* 三[△]という家の屋号。地震のとき家が流されたいしい。
- (14) [p.23] *ga* に独立性の強いと思われるときは、仮りに分けて表記した。
- (15) [p.23] *kosan* 目上に対してのみ使用する。若い人は使用しない。
- (16) [p.24] *ju:te* ことばの間に自然にはさまった一種の発語。
- (17) [p.31] 一般には *waru:temo* であるが、老人にはこのような特殊の言い方がある。
- (18) [p.31] *ako* (あそこ) 幡多地方のみならず、県下で広く使用される。(長岡郡大豊村などを除く。)
- (19) [p.32] 録音の関係で明瞭性を欠く。*sikizitu* を意図したものか。ちなみに「しき」は、浜田数義氏『大方町方言集』に、「正月、盆など年中行事として決っている休日」とある。
- (20) [p.33] 話の途中にはさむ一種の間ことば。ただし一般には使われぬ。
- * [p.22] [*o:rjo*][*orijo*] あたりを目指していると思われるが、[*dgi:ro*] に近く聞こえる。

非 売 品

1968年3月

国立国語研究所 話しことば研究室 発行

東京都北区稲付西山町